

はくぶつかん

HIRATSUKA CITY MUSEUM '87 12月号

❀❀❀12月の行事❀❀❀

12月

- 5 | 土 | 古文書講読会／土曜観察会
- 12 | " | 石仏を調べる会
- 12～13 | | 天体観察会" ふたご座流星の観察 "
- 13 | 日 | 相模川を歩く会
- 19 | 土 | 古文書講読会／土曜観察会
- 20 | 日 | 体験学習" おかざり作り "

◦ 寄贈品コーナー

1～27 民俗部門の展示

1月

- 9 | 土 | 土曜観察会／石仏を調べる会
- 12 | " | 星をみる会" 冬の星雲・星団をみよう "
- 16 | " | 古文書講読会
- 17 | 日 | 自然観察会" 冬越しの虫や植物の観察 "

◦ 寄贈品コーナー

5～30：歴史部門の展示

◦ プラネタリウム

7～2月末：宇宙への道

● 自然観察会

丹沢を展望しつつ、冬越しの虫や植物の観察をします。

日：1月17日(日) 雨天中止

時間：午前9時～午後3時

場所：平塚市土屋～中井町遠藤原付近

申込み：1月5日までに往復ハガキで。希望者多数の場合は抽選で30名。



ドームスクリーン補修工事のため プラネタリウムを お休みします

プラネタリウム室のドームスクリーンを補修工事するため、まことに勝手ながら、12月1日より年内いっぱい、プラネタリウム投影をお休みさせていただきます。

来年、1月7日(木)よりピカピカのドームスクリーン上に輝く星をお見せいたします。ご期待ください。

休演期間 12月1日～27日

年末年始休館のお知らせ

今年も残り少なくなりました。博物館の年末年始の休館日は次の通りです。

12月28日(月)から1月4日(月)まで

来春は5日の火曜日から開館いたします。お元気で良い年をお迎えください。

古文書講読会

—見聞記—

古文書講読会の会場は、1階奥の講堂である。テーブルに椅子を寄せたグループ学習の形で、小寄せが4つ、大寄せが1つ、島状に設けてある。順にいこう。講堂入口に土井学芸員が坐っていて、着順に出席の丸印を記すと、古文書の箱を示す。箱の中は本物の古文書である。会員は1枚を取って席につき、古文書を左に、右に原稿用紙を置いて、古文書から読みとった文字を書き綴る。見渡すとその手許には次のものがあつた。まず古文書用語辞典、近世古文書解説字典、近世地域文書字鑑。くずし字用例辞典に漢字くずし方辞典、入門、近世文書字典、異体字解説字典、更に古語辞典改訂新版というのもあつて、懐かしや旺文社の刊だつた。

ここまでだと、どこぞのゼミか教室風景にみえてくるが、自学自習というところがピカッと違う。会担当の土井学芸員は時に巡回して相談にのるが、こうですよとは言わないで、隣り同志頭をよせ、辞書をめくり、出向いて先輩の知を借りても、自分で解明するしかない。意地の悪いことに、こっちがまるっきり判らないと、辞書すらひけないのだそう。してみると、机上に積まれた辞書の山は、それなりの進度を示していたってわけか。ウームご難儀なことでもあります。

「古文書」

過去の時代の史料となる古い文書のことで、早い話、上のお達し、村の興亡、人の出入り、金銭米穀薪炭の貸借やら助っ人、人足の件、田畑の出来高豊凶、水争いやら願上げの御文やら、浮世の諸般が書き付けてある。従つてこれを読み取る技は、歴史学の基礎にかよう訳有りの技。ところが古文書に満足なのは甚だ少ない。墨字で書いてはあるが、

その文字の書きようは、みみずがのたくった、と、いいたいところだが、なにみみずだつて、こんな風にのたくるのは難かしかろうと同情したくなる按配なのだ。おまけに紙魚の喰い噛った跡が、レトロなレース飾りになっている。数学の虫喰い算なら、足すの引くの掛けるの割るので見当がつくが、お人の書かれた文書だから、ハテ何という文字があつたのやら、覗きこんだ私の方がもの狂おしくなつた。聞けば古文書には書式様式というのがあつて、馴ればおよその見当はつくのだそう。こうなると一概にお役所文書をけなせなくなる。さきゆき古文書になるのだから。

などと思う

のは束の間、「天保の大飢饉の折、1カ村が無利息で郷借りした」という声が飛びこんで来た。とたちまち「利子は1割2分以上とるのは禁止になつてるよ」「いや建前、建前。実際にはだ、穀物貸しで5割から10割もとつたそう」と蜂の巣になる。かたや「…土斗…」を中において「土斗つて何かしら」と思案にくれていらつしゃる。その向うは、金1両2分永80文はなんぼのものかと換算中であつた。

「1両は4,000文で1貫文は1,000文だが、一両が6,000文から8,000文でまかり通つたことがある。しかし永（永楽銭）は1貫文で1両のきまりだつた」と土井学芸員の説明が入つた。会員諸氏のお顔は面白てたまらぬさまに輝いて、紅潮したお顔が左右に向くとそこからまた話の穂が開いてゆく。門外漢の私にもそれは感動にたる光景だつた。実にいい。言いたくないが一寸妬げ申した。

ただ読むだけでなく、文書の中身を調べようと発足したのが地域史研究会で、全員講読会のOBで成る。56年に手書きで第1号、第2号はバイトで得たお錢を集めて58年に刊行し、第3号はこの12月に出版するという。まことにどうも頑張つておるのでありました。帰ろうとしたら一声あり、「老いを忘れ、青春の血を燃えたたせて、喧々愕々やっていると書いてくれ」と。いやほんと、あの熱気には参りました。ハイ、仰せの通り、ここにしっかりと記載いたしましてございます。

（和田）

平塚市史刊行の御案内

平塚市史は全16巻を刊行する予定ですが、現在は第5巻までをいずれも資料編として発刊しています。

第1巻 資料編(古代・中世)

監修～ 中世史研究家(市文化財保護委員)

鈴木良一先生

総目次～ 1 文書、2 記録(歴史書等)、3 金石文その他、4 付録 北条氏所領役帳。

現在調査確認されている市内の古文書は2万点におよんでいます。中世に限ってみますと極めて少ないためそのほとんどが収録されています。この巻で特筆すべきことは昭和51年に博物館が市内岡崎の今井治良家の文書を調査中に発見した北条氏所領役帳の底本が全文収めてあることです。この役帳は河内狭山藩北条氏から出たもので、元文五年(1740)同藩家老朝比奈泰亮の筆によるものです。市は昭和61年に古記録として重要文化財に指定しました。

第2巻 資料編(近世1)

総目次～ 1 平塚市村高・領主書上、2 旧市地区資料、3 大野地区資料、4 豊田地区資料、5 神田地区資料、6 城島地区資料、7 岡崎地区資料。

第3巻 資料編(近世2)

総目次～ 1 金田地区資料、2 金目地区資料、3 土沢地区資料、4 旭地区資料。

第4巻 資料編(近世3)

総目次～ 1 宿駅と村の交通・運輸、2 村と水利
3 村々の寺社、4 中原御林、5 報徳仕報、6 学芸
7 生活の中から、その他。

第2～4巻監修、明治大学講師 神崎彰利先生

近世相模国は54の村から成っており、第2、3巻では地域を主体とした資料を載録したのに対し第4巻では、農村地域の水利関係や平塚宿の交通集落等一定の主題による資料を収め、数多い近世文書の中から、人びとの生活、領主の支配など究明するに適切な資料が選択されています。

第5巻 資料編(近代1) 慶応4年～明治22年

監修～ 中央大学教授 金原左門先生

総目次～ 1 県制の変遷・大区小区制、2 地租改正と村むらの景況、3 真土事件とその社会的影響
4 民政・教育・宗教・産業等の諸政策、5 地方三新法体制、6 自由民権の潮流と明治地方自治制。

この時期は明治政府の近代化づくりの意向を受けて地域の人びとの生活の営み、生産と労働にいそむ実態をあきらかにする目的で448点の資料が収録されています。

最も注目すべきことは、明治11年に起きた真土事件で土地所有権の争いから農民が戸長宅を襲い家族らを殺害した事件です。

地租改正という土地改革が発端となっているだけに県内外に衝撃を与えました。

この裁判関係や各種の歎願書等も収録されています。(南里)

● お問い合わせは平塚市博物館市史編さん係へ
(平塚市浅間町12-41) 電話(32)5843

なお平塚市史の頒布価格は次のとおりです。(郵送の場合は送料400円が必要です)

○第1巻	資料編古代・中世	A5判888頁	5,300円
	付録 北条家過去帳・北条家系図		
○第2巻	資料編近世(1)	A5判898頁	5,000円
	付録 近世平塚を学ぶ人のために		
○第3巻	資料編近世(2)	A5判872頁	5,000円
	付録 近世平塚の領主たち -領主の印判と花押-		
○第4巻	資料編近世(3)	A5判902頁	5,000円
	付録 近世平塚と近在市場の相場 -相場帳と石代納値段-		
○第5巻	資料編近代(1)	A5判890頁	5,400円

相模の稲作

二階展示コーナー 展25

このコーナーでは、平塚周辺で使われていた稲作の農具や仕事着（野良着）を展示しています。展示のねらいは、稲作に使った農具類を見るだけでなく、写真で展示してある江戸時代末の農耕図と比較することにあります。

「四季耕作図」と名づけられた農耕図は、大磯町黒岩の守屋松三郎氏所蔵のもので、安政6年（1859）の年号が書かれています。約130年ほど前に描かれた図で、これには稲作の作業手順が種籾の準備から収穫祝いまで描かれています。

耕作図では図の右下から作業が始まり、順に上に移っていきます。作業を追ってみると、①俵の種籾を水に漬け、ムシロの上に広げて干す。②苗代に種籾を蒔き、上をホウキでなでる。③田をマンノウで耕す（右中央）。④シロカキを行う。⑤苗をとってテンピンで担いで運ぶ。⑥田植えをする。⑦田の除草を行い、カカシを立てる（右上）。⑧稲刈りをし、牛の背に稲束をつけて運ぶ。⑨女性がセンバで稲こきを行い、クルリで打つ。⑩屋内に移り、トウミで選別してからカラウスで粃すりを行い、マンガクにかけて一斗枡で計って俵に詰める。⑪神社に奉納する。

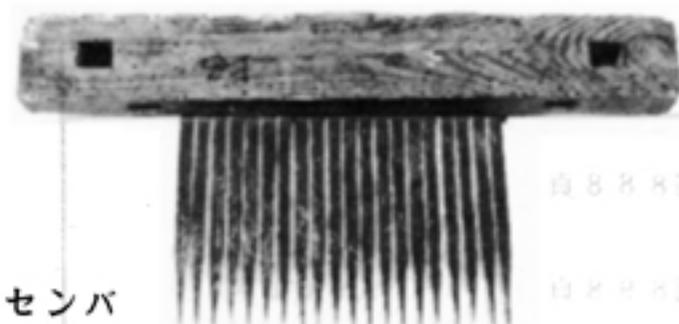
以上のような手順が描かれています。このような農耕図は、一般的には中国の影響を強く受け、地域性が見られないのですが、この図には富士山が描かれたり、田うないに犁（すき）が使われて

なかったり、さらに田植えは男性も行っているなど、平塚周辺の江戸時代末の稲作の様子が多少反映されているともいえます。

稲作に使われる農具は、現在では機械化が進み、手作業による仕事は少なくなっています。しかし、機械化が進んだのは近年のことで、昭和初期までは展示してある農具類が使われていました。実物の農具と「四季耕作図」の農具を比較すると、いくつかの違いがあっても、基本的には変わらないのがわかると思います。

写真のセンバは、脱穀に使われた農具で、「四季耕作図」にも見えています。これは平塚周辺では大正時代、あるいは昭和初期まで使われ、歯の部分に作られた年が刻まれています。展示では2点のセンバを並べてありますが、製作年代によって歯の様式が異なっているのがわかります。

カラウスは粃すりに使う農具で、写真のカラウスと「四季耕作図」のカラウスとは様式が違っています。「四季耕作図」の方が、回転の方式などからは進んだカラウスといえます。写真のカラウスは上から竹さおを吊し、その先を取っ手につけて回転させますが、「四季耕作図」のは鍾木（やりき）式といい、柄を前後に動かして回転させるものとなっています。（小川）



センバ



カラウス